（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

報 告 書

プログラム名	グローバル人材育成・学校現場のグローバル化推進のための スクールリーダー養成循環型研修プログラムの開発
プログラムの特徴	高等学校におけるグローバル人材育成・グローバル化推進を目的に、中核となるスクールリーダーを養成し、勤務校及び近隣校にグローバル化推進教育を働きかける循環システムを構築する。本研修プログラムは次の3段階からなる。 ＜ステップ1＞ グローバル人材育成・学校現場のグローバル化推進のための基礎研修。 ＜ステップ2＞ 研修参加者が、勤務校において生徒・教職員対象にワークショップを実施。 ＜ステップ3＞ 参加者が実施したワークショップの振り返りと新しいワークショップの紹介。 上記のような「研修」「実践」「振り返り」というサイクルと、研修参加者が勤務校の生徒に直接指導するだけでなく、教職員に対してワークショップを実施することで、さらに多くの生徒たちへグローバル教育が広がっていくという、2つの「循環」が特徴である。

平成 29 年 3 月

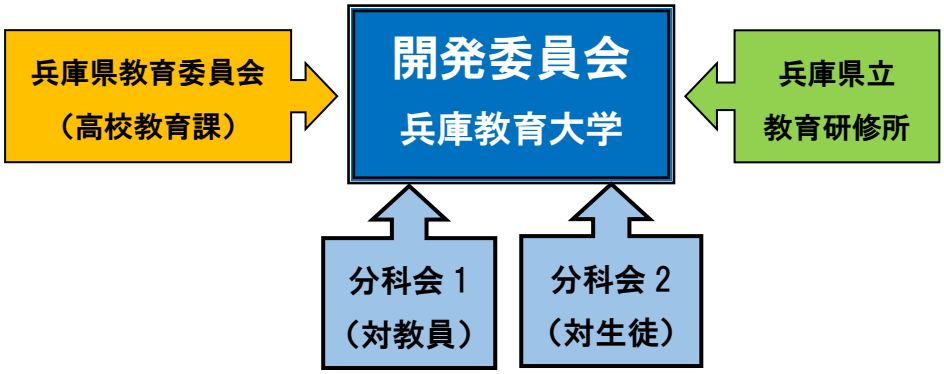
機関名 国立大学法人 兵庫教育大学
連携先　兵庫県教育委員会

はじめに

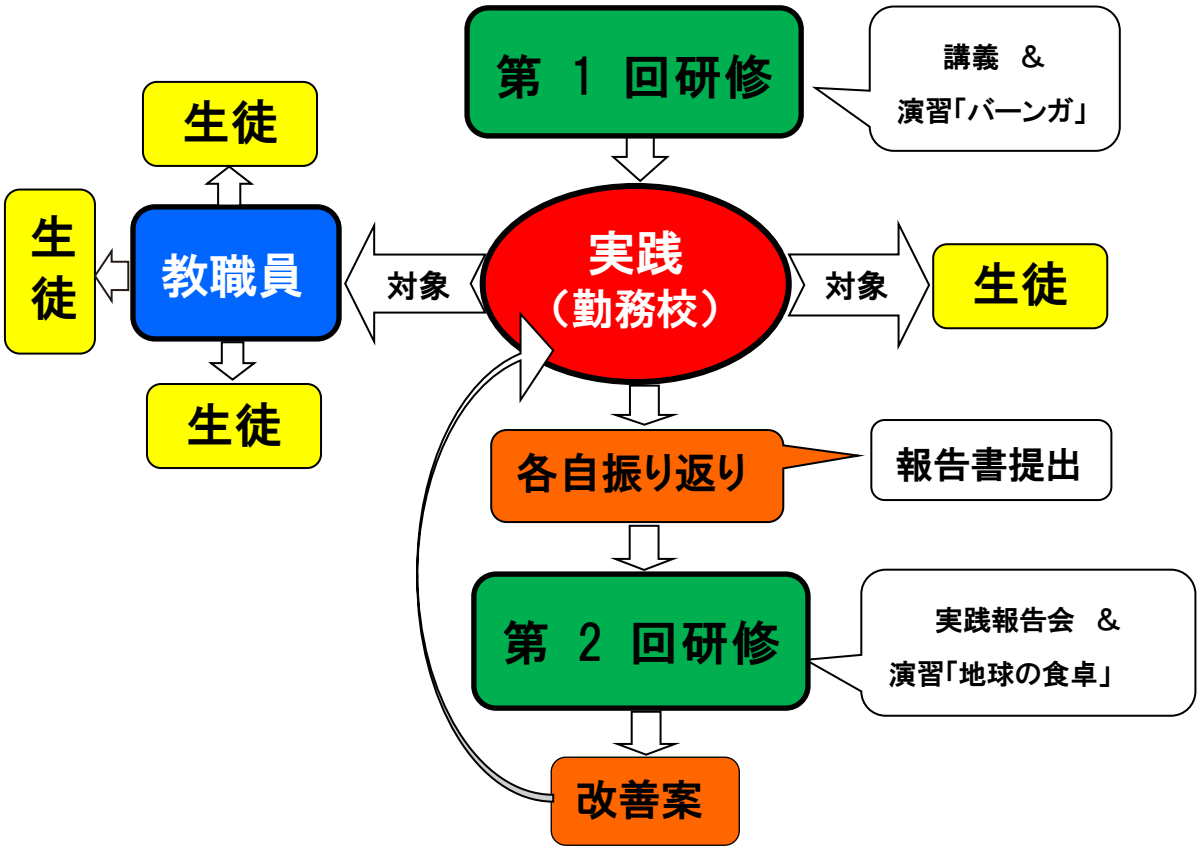
グローバル化が急速に進む今日において、国際社会で活躍できる人材の育成が求められる中、グローバル人材の基盤である語学力、コミュニケーション力、論理的思考力を備え、異文化や国際社会を理解した、学校におけるグローバル人材育成の中核となるスクールリーダーの養成を目的として、平成 28 年 4 月に兵庫教育大学の神戸ハーバーランドキャンパスに「グローバル化推進教育リーダーコース」（教職大学院）が開設された。

上記コースが中心となり、兵庫県教育委員会や兵庫県立教育研修所と連携して開発委員会を設置し、下記のような研修プログラムを開発した。

【組織】



【プログラムの概要】



Ⅰ　開発の目的・方法・組織

1 開発目的

グローバル化が急速に進み国際競争が加速する今日の社会において、その環境の変化・社会構造の変化に適応できる人材、つまり、グローバル人材の育成が喫緊の課題となっている。現行の学習指導要領は「生きる力」を育むという理念のもとに定められており、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断力、豊かな表現力を育てる教育が重視されているが、この点をグローバル人材育成に照らすと、国際社会を理解し協調性を養って異なる民族・文化と共存しながらその多様な社会を「生きる力」を備えた人材の育成が求められていると考えられよう。

このような背景のもと学校教育現場では、小学校外国語活動の導入、外国語指導助手（ALT）を活用した英語教育の活性化など、主として言語教育を通してグローバル人材の育成に取り組んできた。換言すれば、言語運用能力・コミュニケーション能力の育成に関する教育体制は整備されてきたが、それらと同等にグローバル人材の基礎をなすと考えられる国際理解・異文化理解教育は、現状では英語等の教科の中で取り扱われているにすぎず、個々の教員の力量に依存する形で授業が行われ、副次的な位置づけとなっているのが実情である。

そこで本事業では、高等学校教員を対象にグローバル人材育成に向けての総合的な研修を行い、グローバル化する国際社会を力強く生き抜く人材の育成、及び、学校現場のグローバル化に寄与するスクールリーダーを養成する研修プログラムを開発することを目標とする。

本学は、兵庫県教育委員会と連携し、平成16年度より学校管理職・教育行政職特別研修を実施、全国の学校管理職研修のカリキュラムモデルとなっている。また、兵庫県立教育研修所との連携講座では、要請に応じて本学教員が研修を実施するなど、協働体制が構築されており、今後も兵庫県との連携により教師教育を継続していくところである。

これらの状況を踏まえ、本事業では、教育委員会との協働により、包括的かつ体系的にグローバル人材教育をとらえ実践できるスクールリーダーを養成し、研修受講者がリーダーとして各自治体学校現場のグローバル化に資する循環型システム構築のための研修プログラムを開発する。

2 開発の方法

兵庫教育大学「グローバル化推進教育リーダーコース」の教員を中心に、兵庫県教育委員会等と連携して、研修形態・時期・方法等について検討し、下記項目が決定した。

・研修は兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパスで行い、指導助言を研修所にお願いする。
・研修プログラム開発委員会の下に分科会を置き、委員は兵庫県内の国際科・コース等設置高等学校や国際理解教育部会加盟校など、グローバル教育推進校を中心に選ぶ。
・分科会委員が研修を受講し、各自勤務校で実践した後、実践報告書を開発委員会に提出する。
・対象別の分科会で、報告書を元に課題や改善案を検討し、より効果的な実践方法を策定する。
・さらに新たなワークショップを体験し、勤務校で実践した後、自主勉強会等で検討していく。

3 開発組織

(1) 兵庫教育大学と兵庫県教育委員会等との連携状況

平成16年度から共同実施し、全国の学校管理職研修のカリキュラムモデルとなっている「学校管

理職・教育行政職特別研修」をはじめ、所管の兵庫県立教育研修所との連携講座、兵庫県内の市町教委との連携研修、近年では、英語指導力向上事業等、兵庫県の現職教員等の教育専門職の資質能力向上を図る研修プログラムを共同開発し、実施してきた。

また、兵庫県教育委員会の重点施策の一つとして、グローバル化に対応した教育の推進を掲げ、兵庫県立高等学校において、英語教育の充実、グローバルリーダー育成、SGHの展開等に積極的に取り組んでいることから、本学との連携･協働により当研修プログラムを開発し、実施・検証を行い、兵庫県内の高等学校をはじめ、兵庫県内の学校現場のグローバル化に資するスクールリーダーとなる教員の力量形成と資質の向上を図ることとした。

(2)教育委員会等との連絡調整等

日　程	会　場	内　　容
5 月 17 日	兵庫県教育委員会	第1回研修プログラム開発委員会 研修プログラム概要確認、今後の予定等の確認
5 月 27 日	兵庫県立教育研修所	第 2 回研修プログラム開発委員会 研修形態・内容について検討、研修への協力依頼
6 月 17 日	兵庫教育大学 神戸ハーバーランド キャンパス	第3回研修プログラム開発委員会 研修プログラム案・実施計画策定作成、ワークショップ実施計画策定
11 月 1 日	兵庫教育大学 神戸ラボ	第4回研修プログラム開発委員会 兵庫県立教育研修所の来年度講座への編入について
12 月 9 日	兵庫教育大学 神戸ハーバーランド キャンパス	第5回研修プログラム開発委員会 実施報告書（案）検討、研修プログラム評価、及び次年度に向けた改善と新たな取組の検討

(3) 研修プログラム開発委員会

研修プログラム開発のための組織として，本学及び兵庫県教育委員会等からなる研修プログラム開発委員会を設置した。

No	所属・職名	氏 名	担当・役割
1	兵庫教育大学　大学院学校教育研究科 グローバル化推進教育リーダーコース		
	准教授	川﨑　由花	総括
	特任教授	楠本　信治	研修の企画・実施
	特任准教授	大山　守雄	〃
	特任教授	生駒　勝信	研修の実施・記録
	助教	グレイディ　クレア	〃
2	兵庫県教育委員会高校教育課　副課長	志摩　直樹	研修の指導・助言
	主幹	桂　敦子	〃

3	兵庫県立教育研修所　　教務部長 主任指導主事	宮垣　覚 松本　久永	研修の指導・助言 〃

「研修プログラム開発委員会」分科会

教育委員会や教育研修所の助言により、分科会を設けた。分科会の分け方は、実践する対象によって、「分科会 1」（教職員対象）と「分科会 2」（生徒対象）とした。

	学校名	特色（科・コース等）	氏　名	教科
分科会1	宝塚西高等学校	国際教養ｺｰｽ	味岡　陽子	英語
	明石城西高等学校	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・探求ｺｰｽ	雲田　貴之	英語
	鳴尾高等学校	国際文化情報科	伊達　久代	英語
	西脇北高等学校	多部制	辻　真吾	地歴・公民
	須磨東高等学校	国際理解教育部会	中谷　肇	英語
	夙川学院中学校・高等学校	国際バカロレア(MYP)	丸山　幸宏	国語・英語
	明石工業高等専門学校	グローバル高専モデル校	水野　裕貴	事務職
分科会2の1	神戸鈴蘭台高等学校	国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｺｰｽ	浅子　光一	英語
	宝塚高等学校	国際理解教育部会	井上　真紀	英語
	神戸鈴蘭台高等学校	国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｺｰｽ	大川　幸二	理科
	伊丹市立伊丹高等学校	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ・ｺｰｽ	海見　沙織	英語
	姫路市立琴丘高等学校	国際文化科	塩田　晃士	英語
	姫路飾西高等学校	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ・ｺｰｽ	晋川　真由美	英語
	明石西高等学校	国際人間科	永瀬　次朗	英語
分科会2の2	明石市立明石商業高等学校	国際会計科	西　真未	英語
	三木高等学校	国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｺｰｽ	八王子　譲	英語
	尼崎小田高等学校	国際探求学科	福田　秀志	地歴・公民
	宝塚高等学校	国際理解教育部会	眞鍋　佳子	英語
	鳴尾高等学校	国際文化情報科	山内　淳史	英語
	国際高等学校	国際科	吉井　吏	英語
	神戸市立葺合高等学校	国際科	吉岡　武大	英語

Ⅱ　開発の実際とその成果

1　研修の背景とねらい

グローバル人材の育成に関しては、日本では1996年の「第15期中央教育審議会答申」において、すでに「国際化と教育」に関する内容が盛り込まれ、「異文化に対する理解や、異なった文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度を育成するなど国際理解教育を充実する」ことが謳われている。しかしながら、学校教育現場では、総合的な学習の時間・外国語活動の時間等の中で、担当教員の裁量でこれらの教育が行われているのが実情であり、教員自身体系的にグローバル化教育の方法論等について指導を受けているわけではない。

これらのことから、グローバル化教育ができるトレーニングを受けた教員が不在である点に学校現場のグローバル化に時間を要している原因があると考え、まずは、各学校でグローバル化を推進するスクールリーダーを養成する必要があると考えた。

本研修では、スクールリーダー養成の第一歩として、参加者が児童・生徒に応用できる「異文化理解ゲーム」を実際に体験し、その教授法等について学んだ後、それぞれの勤務校で研修内容を同僚教員に教授していく形をとる。つまり、一人のスクールリーダーが複数の教員に研修内容を伝搬し、さらにその実践を研修に持ち帰って報告、議論を重ねて研修の内容をより教育効果の高いものに改善していくという循環型を採用することで効率よくグローバル化教育を実践できる教員の養成につながるものと考える。

2　研修対象

兵庫県内の国際科・コース等設置高等学校や国際理解教育部会加盟校など、グローバル化推進校の教員（20 名程度）

3　研修内容

まず、簡単に日程と内容を表にまとめてみる。

日　程	会　場	内容、形態、使用教材、進め方等
7月5日	兵庫教育大学 神戸ハーバーランド キャンパス	＜ステップ1：基礎研修＞【第1回分科会】 ［講義］グローバル教育概論（担当：本学教員） ［演習］「バーンガ」（担当：本学教員）
7月～9月	分科会委員の勤務校	＜ステップ2：ワークショップ実践＞ ［実践］分科会委員による実践（担当：分科会委員） ［各自振り返り］実施報告を開発委員会に提出（〃）
10月21日	兵庫教育大学 神戸ハーバーランド キャンパス	＜ステップ3：リフレクション＞【第2回分科会】 ［報告・発表］（担当：分科会委員、本学教員） ［演習］「地球の食卓」（担当：本学教員） ［事後アンケート］（担当：本学教員）

＜ステップ 1＞【第 1 回分科会】

(1) 日　　時　平成 28 年 7 月 5 日（火）13：30～16：30（13：00 受付）

(2) 場　　所　兵庫教育大学　神戸ハーバーランドキャンパス　講義室 4・5

(3) 参 加 者　兵庫教育大学「グローバル化推進教育リーダーコース」

川﨑由花（准教授）、楠本信治（特任教授）、生駒勝信（特任教授）

大山守雄（特任准教授）、グレイディ クレア（助教）

分科会委員（兵庫県内の国際科・コース等設置高等学校教員等）21 名

兵庫県立教育研修所　高校教育研修課　松本久永（主任指導主事）

(4) 次　　第

①開会挨拶（楠本）

②概要説明（川﨑）［10 分］

③研修：講義「高校生の海外留学の意義」（大山）［30 分］

「内向き志向」といわれる日本の若者、特に高校生を直接指導する教員の高校生海外留学に対する興味・関心を高めることによって、学校現場における海外留学に対する積極的姿勢を醸成することを目的に、元 AFS 事務局長の大山特任准教授が多くの海外留学体験例を紹介し、早い段階での海外留学の意義を強調した。

④研修：演習「バーンガ」（大山）［90 分］

［使用教材］トランプ 6 セット（4 人 1 セット）

「バーンガ」というトランプを用いたゲーム（P.8 参照）を通して、異文化コミュニケーションを体感するワークショップ。実は、各テーブルのルールが少しずつ違っているが、「話してはいけない」という制約の中で、みんな悪戦苦闘する中、自分が今まで持っていた「常識」や「ルール」が通用しない場面に置かれた時、どういう気持ちになり、どんな混乱が生じ、どのように対応していくのかを疑似体験した。

⑤研修：討議［45 分］

演習で体験した「バーンガ」についての振り返りと勤務校での実践計画について、教員対象チームと生徒対象チームに分かれて討議した。

［振り返り］

どちらも「講義ではなくゲーム形式だったので、楽しく異文化理解について学べた」「自分のルールが正しいはずと思い込んでしまった」「主張の違う者同士が調整して、折り合いをつけることが大事だと思った」「言葉で伝えることの大事さ、有難さが分かった」「パートナーがいてくれて、お互い安心感があった」等の意見が出た。

［実践計画］

生徒対象チームでは、「海外語学研修の事前研修に使えそう」「ALT との TT クラス（20 人）で実施したい」「クラス 40 名は多すぎるのではないか」「40 人で行う場合は、普通教室より広い教室で行う方が良い」「英語の時間に英語を使ってやってみたい」「ゲームの後に話し合いの時間を設けることが大切」等の意見が出た。

教員対象チームでは、「時間を考えると、教員を集めるのは難しい」「空間が狭いと隣の声が聞こえてしまうので、広い場所で実施すべき」「パワーポイント等で手順を示した方がやりやすい」「時間がなければ、最後の振り返りはアンケートに書かせても良い」等の意見が出た。

⑥事務連絡（楠本）

７月から９月にかけて教員研修または授業等で「バーンガ」を実施し、9 月 30 日（金）までに実施報告（P.9～）を提出する旨を連絡した。

⑦指導助言（松本主任指導主事）

今回の研修の意義についてまとめるとともに、勤務校での実践についての期待感を述べた。

⑧閉会挨拶（川﨑）

「バーンガ」について

バーンガとは

バーンガはファイブトリックスと呼ばれるトランプゲームで、ゲームのルールは配られたハンドアウトに書いてある。4 人一組のグループに分かれ、それぞれのグループに渡されるハンドアウトに書かれたルールは少しずつ異なっており、異なる点は以下の通り。

・エースの強さ（最も強い／最も弱い）　・切り札（なし／スペード／ダイヤ）

・切り札の使い方（同じ種類がない時／いつでも）　・カードを初めに出す人の順番

バーンガの進め方（例）

ステップ	時間	内　　容
準備	3 分	4 人ずつのグループに分け、トランプをグループに渡す。
ゲームのルールを知る	8 分	ハンドアウトでルールを理解したのち、練習をさせる。
第 1 ラウンド	5 分	黙ってゲームを行なうように指示する。
次のラウンドへの移動	2 分	勝ったペアを次のグループに移るように指示する。
第 2 ラウンド	5 分	黙って 2 回目のラウンドを行なうように指示する。トラブルが発生した場合も言葉は使わないよう伝える。
次のラウンドへの移動	2 分	勝ったペアを次のグループに移るように指示する。
第 3 ラウンド	5 分	第 2 ラウンドと同じように進める。
終了	2 分	最初の位置で、ディブリーフィング（まとめ）をさせる。

配布プリント（例）

FIVE TRICKS

カード　24 枚を使います。各マーク（ハート、ダイヤ、クラブ、スペード）のエース、2、3、4、5、6 を選びます。一番強いカードはエースです。

プレーヤー　4 人で、対角線に座っている人がペアになり、2 人対 2 人で戦います。

配り方　一番背の高い人が初めのディーラー（カードを配る人）になります。ディーラーはカードを切って各プレーヤーに 5 枚ずつ配ります。残った 4 枚のカードは使いませんので、裏向きにして横によけておきます。

開始　ディーラーの左隣の人からカードを表向きに 1 枚ずつ出していきます。時計回りに 4 人が 1 枚ずつ出し、場に出されたカード 4 枚が「トリック」です。

勝ち方　出された 4 枚のカードの中で、一番数の多いカードが勝ちとなります。そのカードを出したプレーヤーが「トリック（4 枚のカード）」を集め、自分の前に表向きにして置いておきます。

遊び方　次のトリックは勝った人から始めます。手持ちのカードがなくなるまで続けます。

出し方　初めにカードを出す人はどのカードでも構いませんが、他のプレーヤーは出されたものと同じマークのカードを出さなくてはなりません。もし同じマークのカードを持っていないときは、違うマークのものを出してください。

切り札　このゲームでは切り札はスペードです。切り札はいつでも出すことができます。（初めに出されたマークのカードを持っていても出すことができます。）あなたより高い数のスペードが出されていなければ、低い数のスペードでもトリックを取ることができます。

続け方　ゲームは持ちカードがなくなるまで続けられます。取ったトリックの数をペア毎のスコアとしてつけておいてください。ディーラーは左に順に移っていきます。

終了　終了を告げられたら、今行なっているトリックを最後までやってください。取ったトリックの数で勝者ペアが決まります。

参考文献：『日本語教授法ワークショップ増補版』（凡人社）鎌田 修・川口 義一・鈴木 睦（編著）

＜ステップ 2＞【勤務校での実践】

実践報告（例）

分科会（　1　）	学校名（　兵庫県立西脇北高等学校　）	氏名（　辻　真吾　）

(1) 日時　平成 28 年 8 月 25 日　15:40～16:45

(2) 対象　教員 36 名（校内で悉皆研修として実施）

(3) 概要　①実施方法　・無作為に 4 人グループを 9 つ作った。

・パワーポイントで事前説明・事後説明を行った。

②時間配分　15:40～15:45　グループ分け・移動、用具の配布

15:45～15:48　事前説明（ルールの理解）

15:48～15:55　ゲームの練習

15:55～16:20　ゲームの実践（3 ラウンドを行った）

16:20～16:25　振り返りシートの記入

16:25～16:35　グループ協議

16:35～16:40　グループ代表の発表（情報共有）

16:40～16:45　事後説明（まとめ）

(4) 受講者の感想

・ルールが違うことで、ストレスを感じた。

・言葉が使えないので、混乱した場を収拾することができなかった。

・尖閣諸島の問題も、互いの国の歴史認識やルールの違いから生じていると改めて感じた。

・自分たちのルールを通したり、押しつけようとしたりする意識が働いた。

・人とのもめごとの際、言葉を使わないということは、お互いが相手の気持ちにどう寄り添い合えるかが大切であると感じた。

・世の中のルールやマナーは一つではなく、お互いに確認し理解し合うことが重要であると認識できた。

・ジェスチャーで複雑なルールを伝えなければならないことに、もどかしさを感じた。

・途中、相手のルールを理解しようと心がけるようになってからは、ストレスが減った。

・元のグループに戻ったとき、ほっとした気持ちになり、居心地がよかった。

・同じルールを共有するペアの中に結束感が生じ、ゲームを重ねる毎にその結束感が強くなっていった。

・生徒も高校入学まで異なるルールの中で生きてきた子もいる。その子の背景にあるルールの理解も学校社会では大切ではないかと感じた。

(5) 成果と課題

①成果

トランプゲームを取り入れたことで、楽しく明るい雰囲気の中で研修を進めることができた。参加した教員の感想からは、やらされ感や無力感を抱くことなく、今回の研修に積極的に取り組めたことがうかがえる。

ルールが異なる相手とノンバーバルな環境の中で時間や空間を共有することが、いかに窮屈でストレスが溜まることなのかを参加者が実体験できた。また、異文化衝突が生じる初期の場面を疑似体験できた。

世界の人々が、互いの異なる慣習や文化を理解し合い、衝突なく平和に暮らしていくには、共通の言葉（現在では世界の共通語である英語）をマスターし、言葉によって課題を解決していくことが大事であることを参加者が認識できた。

②課題

今回の研修では、最後のまとめを実践者の判断でおこなったが、プログラムの目的に適合した結論を参加者に伝えることができたのか不明である。できれば、まとめに用いる文章をあらかじめ準備いただきたかった。

分科会（　2の2　）	学校名（　神戸市立葺合高等学校　）	氏名（　吉岡　武大　）

(1) 日時　1年1組　9月5日（月）　13：00～13：50（50分）(2学期最初の授業)
　　1年2組　9月6日（火）　11：30～12：20（50分）(　　〃　　)

(2) 対象　国際科1年1組18名（留学生1名)、1年2組17名（留学生1名）

(3) 概要　場所：大会議室（約80名着席可能で大スクリーン有）
　　グループ分け：1年1組：4人グループ → 3つ、3人グループ → 2つ
　　1年2組：4人グループ → 2つ、3人グループ → 3つ
　　時間配分：説明5分、練習5分、4ラウンド各6分（移動含む)、振り返り15分

(4) 受講者の感想等（抜粋）

○ゲーム中の進行・ルールについて

・ジェスチャーや絵を描いて説明したら、受け入れてくれた。
・相手の意見を尊重したらうまくいった。条件が違ったら口論とかになっていたかも。

○言葉について

・言葉が通じることの大切さを、身をもって知ることができた。
・自分の言いたいことが話せなかったので、伝えるのが難しかった。

○どう対応したかについて

・自分のルールを相手に押しつけてしまった
・口パクや小声で話すとかしてしまったが、実際全く知らない言語だと大変だと思った。

○驚き・疑問・困惑

・当然どのテーブルもルールは同じだろうと思い込んでいて、移動するたびに混乱した。
・初めは意味が分からなかったが、説明されたとたんにスッキリした。

○気づき・今後について

・相手の意見（ジェスチャー）を理解する力と、適応力が大事だと思った。
・尊重やゆずりあい、時には意見、相手を受け入れる柔軟さが大事だと思った。
・他の人のルールを理解しようとし、お互いの納得いくよう結論づけることの大変さと大切さを感じた。
・何も知らずにいきなりルールや文化の異なる場所に行かず、少しは学んでから行くのが必要だと感じた。
・国際理解をしていく上でとても大切なことや根本的なことが詰まったゲームで、コミュニケーションがとれないときに感じるストレス、不安なども感じた。
・実際国が違えば起こり得ることで、こんなにも難しいことが改めて分かり、相互理解のために何をすべきか考えないといけないと感じた。
・I should know how to communicate without speaking.
・I need to be more open to rules, but find a way to coexist with the different rules.

○その他

・これまで国と国の対立を嘆いていたが、こういうところに本質があると分かった。行動を制限され、また時間がない中でトラブルが起これば暴走してしまうことを知った。

(5) 成果と課題

＜成果＞

生徒の感想に見られるように、「異文化と遭遇したとき、言語が通じないとき、何を感じるか」を、生徒がゲームを通して各々疑似体験できていた。特に、一人でプレーした生徒は他よりも困惑したであろうが、他より収穫があったと思われる。

＜課題＞

最初にルールを理解するのに時間がかかっていた。振り返りに時間がかけられず、何を学んだか、何を表しているかを深く考えさせられなかった。また、話さない、文字は書かないというルールを破った生徒がいた（振り返り時に「Breaking the Law だよ」と伝えた)。

パワーポイント・振り返りシート（例）

八王子　譲（兵庫県立三木高等学校）

FIVE TRICKS
（ファイブ・トリックス）

● 競争しながら協力することを体験するトランプゲーム

● ルール

① ゲームが始まったら一切話さない！

② 文字を書くことも禁止！　ジェスチャーか絵を描いてコミュニケーションする。

● ゲーム

①プリントのルールをしっかり読んで理解する。

②トランプのエース、２、３、４、５、６ の24枚を使用する。不必要なカードはケースにしまっておく。

③対角に座った２人がペア（味方）となる。

④カードは５枚ずつ配られる。

⑤４人がカードを１枚ずつ出し終えた時点で、１つのゲームは終了する。

⑥出された４枚のカードの中で一番強いカードを出した人が勝ちとなる。勝ったペアに対して１ポイントが与えられる。ポイントをスコア用紙に記入する。

⑦５分間ゲームをして、その時点でスコアの高いペアが勝ちとなる。

①練習（８分）

●この時点ではグループ内で話しても良い。ペアを確認する。

●プリントをよく読んで、ゲームのやり方を理解する。

●練習ゲームを行い、やり方を確認する。

●８分後に、プリントを回収する。

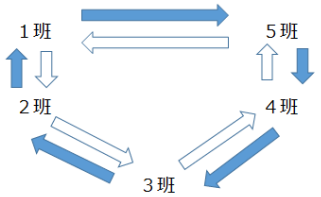
②第１ラウンド（５分）

●ここからが本番。これからは一切話してはいけない。もし何かコミュニケーションをとりたい時は、ジェスチャーか絵を描いて伝える。

●スコアはディーラー（カードを配る人）の右側に座っている人がつける。

③第２ラウンドへの移動（２分）

勝ったペアは時計回りの右隣のテーブルに、負けたペアは左隣のテーブルに移って、次のゲームを始める。（勝ち➡ 負け⇨ ）



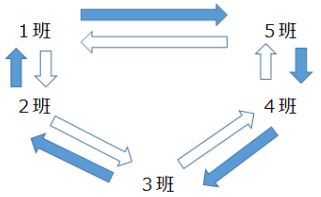
④第２ラウンド（５分）

●黙ってゲームを行う。もし何かコミュニケーションをとりたい時は、ジェスチャーか絵で伝える。

●スコアはディーラー（カードを配る人）の右側に座っている人がつける。

⑤第３ラウンドへの移動（２分）

勝ったペアは時計回りの右隣のテーブルに、負けたペアは左隣のテーブルに移って、次のゲームを始める。（勝ち➡ 負け⇨ ）



⑥第３ラウンド（５分）

●ペアを代わる。

●黙ってゲームを行う。もし何かコミュニケーションをとりたい時は、ジェスチャーか絵で伝える。

●スコアはディーラー（カードを配る人）の右側に座っている人がつける。

⑦終了（５分）	⑧まとめ（１５分）
●勝ち数の確認。３勝、２勝、１勝、０勝。 ●元のテーブルに戻る。ここからは話してもよい。	●「振り返りシート」を記入する。グループ内で話し合っても良い。

振り返りシート

1　どんな気持ちになりましたか。

2　なぜそう思ったのですか。

3　ゲームのどの段階でそう感じましたか。

4　パートナーに対してどのように思いましたか。

5　ゲーム中に起きたことで、びっくりしたことはありますか。

6　ゲーム中に起きたことで、面白かったことはありますか。

7　ゲーム中に起きたことで、ストレスを感じたことはありますか。

8　BARNGAを体験してどんなことが分かりましたか。

9　ゲーム中のどの場面が現実のどの状況と類似していますか。

10　ゲーム中のルールや役割で、日常に思い当たる類似点がありますか。

11　分かったことが現実に活かせるのではと思うことはありますか。

＜ステップ 3＞【第 2 回分科会】

(1) 日　　時　平成 28 年 10 月 21 日（金）13：30～16：30（13：00 受付）
(2) 場　　所　兵庫教育大学　神戸ハーバーランドキャンパス　講義室 4・5
(3) 参 加 者　分科会委員 19 名（2 名欠席）　他は前回と同じ

(4) 次　　第
①開会挨拶（川﨑）　②資料説明（楠本）

③研修：実践報告［45 分］

④研修：全体発表［30 分］

［実施方法］

通常の授業で実施（1 時間、2 時間連続）、海外語学研修の事前学習、事後学習として実施、職員研修（夏季休業中、臨時休業日）として実施等の報告があった。

［成果】

「生徒たちが楽しんで取り組んでいた」「異文化理解やコミュニケーションについて考える良い機会になった」「仲間の大切さ、言葉の大切さ、外国人の立場等についても気づきがあった」等、概ね好評であった。

［課題］

「ルールが複雑で分かりづらく、開始までに時間がかかりすぎた」「自分の事前準備が不十分だったため、スムーズに進行できなかった」「振り返りの際に教師が誘導しすぎた。もっと生徒に考えさせる時間を取るべきだった」「40 人では多すぎた。普通教室では隣の声が聞こえてしまうので、やりにくかった」等の反省点が出された。

［改善案］

「もう少しルールを分かりやすくシンプルにする」「生徒がしっかり振り返ることができるよう時間を十分確保する」「人数は 20～30 人が望ましい。教室も広い方が良い。監視役も必要」「パワーポイント、振り返りシートは必須」等の意見が出された。

⑤研修：演習「地球の食卓」（大山）［60 分］

［使用教材］『地球の食卓―世界 24 か国の家族のごはん』（TOTO 出版）写真・学習プラン付

世界 24 カ国 30 家族を訪問し、その家族と 1 週間分の食料をならべて撮影した写真を使って、食から広がる様々なテーマ（文化・宗教の多様性、エネルギー、ごみ、グローバリゼーション、ライフスタイルの変化等）について学ぶことができる。

今回は 5 人 1 組の 1 チームに異なる写真を 2 枚ずつ配布し、家族や食材から「どこの国か」「どのような特徴があるか」「問題点は何か」等について話し合ったことを、配布した模造紙に書き込んで、最後に発表してもらった。

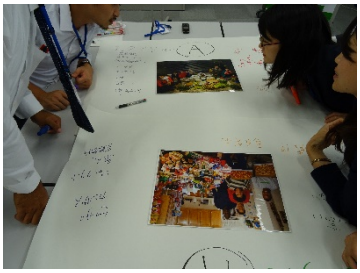
［配布写真］（例）

（アメリカ）

（フィリピン）

（エクアドル）

［説明～グループワーク］



［全体発表］

⑥事後アンケート（P. 15・16）・事務連絡（楠本）

7 月の研修、勤務校での実践、10 月の研修、及び今後の勉強会や研修についてのアンケートを実施するとともに、今回使用した教材を紹介し、機会があれば勤務校で実践してほしいと伝えた。

⑦指導助言（松本主任指導主事）

前回から勤務校での実践を経て今回の研修に繋げた「循環型」の意義と今後の継続的取組への期待感について述べた。

⑧閉会挨拶（川﨑）

4　研修プログラムの評価・改善

(1)「事後アンケート」(無記名) 結果・まとめ (19 名分)

(1 良くなかった　2 あまり良くなかった　3 良かった　4 とても良かった)

1	7 月 5 日の研修は	1 (0)　2 (0)　3 (6)　4 (13)
	・普段の研修と違って、楽しく学ぶことができた。(2) ・「バーンガ」という素晴らしいゲームを教えていただいて、良かった。(8) ・とても楽しく、国際理解や異文化理解について学ぶことができた。(6) ・異文化理解についての活動を体験することができて、大変有意義だった。(4) ・自分自身が異文化理解について考え直す良い機会になった。(4) ・自分自身が実際に体験することで、具体的な実践イメージができた。(3) ・具体的な実践方法が学べたし、配布プリントも役に立った。(2) ・グローバル教育の教材、方法を学ぶことができて良かった。(2) ・グローバルリーダー育成につながる活動があれば、もっと良かった。	
2	自校での実践は	1 (0)　2 (2)　3 (9)　4 (8)
	・準備がシンプルだったので、思ったより実践しやすかった。(2) ・実施前は不安だったが、想像以上に生徒の反応が良く、好評だった。(4) ・異文化理解について、生徒に多くの気づきを与えることができた。(6) ・授業だけで終わらず、今回の気づきを普段の生活に生かしてほしい。 ・生徒や教職員について、いろいろと人間観察ができて面白かった。 ・自分自身の準備不足から、あまりうまくいかなかった。(2) ・今後も続けたい。次回はもっと工夫して、うまくやりたい。(3) ・生徒対象の実践では「グローバルリーダー」につながらないと思う。	
3	10 月 21 日の研修は	1 (0)　2 (0)　3 (9)　4 (10)
	・他校の先生方の実践報告が、それぞれ特徴があって参考になった。(2) ・実践の課題と改善策が共有できたし、新しい手法が学べて良かった。(8) ・改善策についての指導助言があれば、もっと良かった。 ・今回のワークショップも楽しかったので、ぜひ実践したい。(4) ・実践しやすい教材を紹介してもらって良かった。(3) ・参加者の博学に驚くとともに、見聞を広めることができた。(2) ・世界の地理や宗教について勉強しようと思った。 ・アクティブラーニングは楽しかったが、発展性がないと思った。 ・興味ある活動だったが、前回の「バーンガ」ほどの驚きはなかった。	

（ 1　参加したい　　2　不参加　　3　わからない ）

4	今後、勉強会を開いたら	1（ 10 ）　2（ 2 ）　3（ 7 ）
	・他校の先生方と意見交換することは、とても有意義だと思う。 ・国際理解や異文化理解に関する新しいアクティビティを学びたい。(2) ・国際感覚を養う活動や実践的な教材を教えてほしい。(3) ・校務との兼ね合いで参加は難しい。定期考査中なら出やすい。(3)	
5	来年度、同様の研修を開いたら	1（ 11 ）　2（ 1 ）　3（ 7 ）
	・今回のようなワークショップ形式で、ぜひ開いてほしい。参加したい。(3) ・研修所の初任研や 5 年次研修等に入れてほしい。同僚にも勧めたい。(2) ・研修、実践、報告のサイクルが良かったので、3 回目は必ず開くべき。 ・グローバル化の光と影の部分を取り上げてほしい。 ・校務があり出にくい。定期考査中や夏季休業中なら参加する。(3)	

(2) 成果と課題

成果としては、今回のプログラムの特徴である「研修」「実践」「振り返り」というサイクルの意義と効果を確認できたことと、講演や講義中心の研修よりも「アクティブ・ラーニング」の導入の効果が大きいことも再認識できた。

ただ、参加者の多くが若手教員だったこともあり、教職員対象の実践が難しかった点が課題として残った。グローバルリーダーの育成という目的を考えると、不十分と言わざるを得ない。

(3) 改善案

12 月 10 日・11 日に大阪大学において開催された「グローバル人材育成教育学会」第 4 回全国大会で、今回の取組について実践発表する機会を得た。その中で、「グローバルリーダー」の定義や本プログラムの最終目標や到達点について問われたが、これについても今後の取組の中で明確化する必要がある。いずれにしても、今後もこういう発表の機会を活用して本プログラムを紹介していくことで、少しでも多くの学校で実践してもらえることを期待する。

Ⅲ　連携による研修についての考察

1　連携のメリット

企画段階で兵庫県教育委員会（高校教育課）の助言を受け、実際の研修については、本学スタッフが中心となって企画運営し、県立教育研修所に指導・助言をお願いしたことで、研修の意義を深めることができた。

また､分科会形式をとったために､所属長の協力を得て教員が参加しやすくなっただけでなく、単なる研修参加者という受動的姿勢から、プログラム開発に携わっているという主体的な意識に変わった点は大きい。

2　連携の推進・維持について

Ⅰの3で述べたように、以前から県立教育研修所において「学校管理職・教育行政職特別研修」を県教育委員会と共同実施しており、今後も兵庫県の現職教員等の教育専門職の資質能力の向上、中でもグローバルリーダーの育成という観点で、本学教職大学院のグローバル化推進教育リーダーコースとの連携が求められている。

3　今後の課題等

12 月 9 日に実施した研修プログラム開発委員会において、次年度の県立教育研修所主催の研修講座に本プログラムを組み入れる方向で検討することが決まった。

また、県教育委員会（高校教育課）から、今後は「初任者」「ミドルリーダー」「管理職」等の対象別に研修プログラム開発を行ってほしいという要望が出され、引き続き教育委員会や教育研修所と連携して取り組むことになった。

Ⅳ　その他

［キーワード］　グローバル研修、国際理解、異文化理解、バーンガ、地球の食卓

［人数規模］　Ｃ（バーンガを実施する場合、4 の倍数の人数が望ましい）

［研修日数(回数)］　Ｂ（実施後の振り返りが重要）

【問い合わせ先】　国立大学法人 兵庫教育大学

〒673-1494 兵庫県加東市下久米942－1

総務部企画課・副課長　小山直樹

TEL/FAX　0795-44-2334（直通）/ 0795-44-2011

E-mail ： office-kaikaku-t@hyogo-u.ac.jp